

# 大自然の自浄作用 竹下数馬

—アキグヒノウウシノカミについて—

古事記の中でもミソギハラヒ（神被）の神話がきわめて大事なものであることは今さら申しあげるまでもありません。

イザナギノミコト、イザナミノミコトの二神は天つ神の命にしたがって国生み、神生みをなさるのでありますが、神生みが終わらないうちにイザナミノミコトは火の神ヒノヤギハヤヲノカミを生まれることが原因となつてとうとうあの世であるヨミノクニに行つてしまわれるのであります。イザナギノミコトは妻との死別を悲んでヨミノクニまで出かけるのでありますがヨモツヘグヒ（黄泉戸喫）をしたイザナミノミコトの制止をも聞かずそのみにくい屍体を見てしまいます。怒つたイザナミノミコトは逃げる夫を追つてヨモツヒラサカ（黄泉比良坂）まで来ますがイザナギノミコトはコトド（車戸、絶縁状）を渡してしまいます。間もなくミコトはきたないヨミノクニでのケガレをはらいのけるために筑紫の日向の橋の小門の阿波岐原に出かけてミソギハラヒをされるのであります。

イザナギノミコトは身につけておられた、杖・帯・裳・衣・禪・冠・手纏等を次々に投げすてます。そうしてはじめて中つ瀬におり

てゆき、水にもぐつてミソギハラヒをされるのであります。多くの神々が誕生するのでありますが、最後に天照大御神・月読命・須佐之男命が出現することになるのでありますが、このあたりは日本神話の眼目とも言ふべきところであらうかと思われます。

さて、ミコトが投げすてた衣に成りませる神の名はワヅラヒノウシノカミであり、投げすてた冠に成りませる神の名はアキグヒノウシノカミであるとあります。

ワヅラヒノウシノカミとはどんな神でありましょうか。日本神紀には「煩神」という字が当てられてあり、煩のウシ（主人）の義と解されるのが普通であります。本居宣長の「古事記伝」には

「和豆良比能宇斯能神、書紀にはただ煩神とあり、和豆良布ハ物に障り滞る意なり、万葉五十三に、可爾可久爾思和豆良比禰能尾志奈可由云ひてかくははいへり、又病を云ふも病にさへられて清々しからぬ意なり、宇斯のことは上伝三の九葉之御中主神の所に云ひつ、さて此の神名、御衣ミケネに由ありても聞えず、強ひて云はば穢れし御衣を脱棄て

たるは煩はしき事を脱れて、心のさはやぎたるに似たればか」とあります。

この本居宣長の解釈はあまり明快ではありません。宣長もちよつと触れておりますように、ワヅラヒとは病のことであり、ワヅラヒノウシノカミとは病氣を直す力（神）をいうのである、というのがわたくしの解釈であります。病氣を直す力とはいわゆる自然治癒力のことです。身につける衣を身体が外から受けるストレス（stress）といたしますならば、ストレスを脱ぎすて（解消）れば身体は内にひそむ自然治癒力によって健康を回復することができますのであります。病氣を直すのは医者や薬ではありません。各人が生れながらに持っている自然治癒力によってのみ病氣は直るのであり、医者や薬はその手伝いをするのに過ぎません。

さて、投げすてた冠に成りませるアキグヒノウシノカミとはどんな神でありましょうか。

まず、本居宣長の意見を聞いてみましょう。

「古事記伝」には、

「書紀には御冠のことは無<sup>ク</sup>テ投<sup>ケ</sup>其<sup>ツ</sup>禪<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>謂<sup>フ</sup>開<sup>ク</sup>嚙<sup>ク</sup>神<sup>ト</sup>あり名<sup>ヲ</sup>義<sup>ヲ</sup>飽<sup>ス</sup>は、冠にまれ、禪にまれ、脱<sup>ス</sup>たる<sup>ニ</sup>処<sup>ニ</sup>の口<sup>ヲ</sup>の開<sup>ク</sup>たる<sup>ニ</sup>貌<sup>ト</sup>、昨<sup>ク</sup>は角<sup>ノ</sup>材<sup>ナ</sup>などの久<sup>ク</sup>比<sup>ト</sup>と同じきか。」

とあって、あい変らず明快ではありません。

宣長以後の学者も大部分はこの説をうけついでています。たとえは、飯田季治はその著「日本書紀新講」の中で

「開嚙神 〓 袴は口を開いて人の半身を呑むに似たる故に開嚙神

と云ふ名を負へるのであるう。」と述べています。

日本古典文学大系の「古事記」に注をほどとした倉野憲司博士は「書紀には『開嚙神』とある。ただし禪に化生した神。名義未詳。」と正直にかぶとを脱いでいます。

「古事記大成」の本文篇で石井庄司氏は、

「書紀一書には、開嚙神とあり、もろもろの罪けがれを口を開けて食うことの神か。大袂の祝詞には、速開津姫という神が、罪けがれをガブガブと呑むことが出ている、その類であろうか。」と述べています。

この石井氏の説の中には、やや見るべきものがあるように思われるのであります。

わたくしの考えではアキグヒノウシノカミとは、食べ物を飽き飽きするほどまでにむさぼり食う神（力）という意味だととりたいてであります。アキグヒとは飽き食い、であります。

ところで、飽き飽きするほど食べると言いましたが一体何をそんなに食べるのでしょうか。このカミの食べるものは、いわゆるご馳走ではあります。ミソギハラヒの最中で化生したカミでありますから払いのけるツミやケガレを食べるのであります。みにくいもの、きたないもの、その他この世にありとあらゆる不潔なもの、不浄なものを食べると考えてよいであります。人間や他の生物が生存してゆく過程ではこのような不潔なもの、不浄なものが何百年、何千年と蓄積してゆくとしますと人間などとうていそこで生活する

ことはできなくなつてしまします。大気、水、火、大地、川それに何よりも海はそれら不潔なもの、不浄なものをいつしかきれいに浄化してくれまします。自然の風化作用やバイキンなどを加えてもよいでありましよう。最近は公害問題がやかましく論議されています。大気や水の汚染はたしかに困つたことですが結局はアキグヒノウシノカミがそれらを食欲に食べてくれるに違いありません。その結果、自然界は清らかな平和を保つてゆくのです。広島に原子爆弾が落された時、その周辺には二十年間は草も木も生えないだろう、と言われたことでありました。しかし実状はどうであつたでしょうか。原子爆弾によつて汚染された大気も水も大地も、間もなく生氣をとりもどしたではありませんか。原子爆弾といえども大自然の自浄作用（わたくしはアキグヒノウシノカミがそれに相当すると考へているのですが）を破壊することはできません。原子爆弾や水素爆弾をはじめ人間の作りだすいかなる不潔、不浄でもアキグヒノウシノカミは飽きるほど食べてくれるのでありまして、そのために大自然はいつの間にか清らかになつてしまつたのです。

アキグヒノウシノカミとは、人々のいみじらう不潔なもの、不浄なものを進んで飽きるほど食べてくれる有難いカミ（力）であり、このカミのおかげ（自浄作用）で人間は救われるのであり、清らかな平和な生活をいとむむことができるのであります。

ツミやケガレを物質的な意味だけでなく人間の精神生活の面にひろげて解釈しても上にあげた事情には変りがないと考へられるのであります。

ところで、このアキグヒノウシノカミとよく似た神が神生み神話

のところに出てきていますのであります。水戸の神である速秋津日子神と妹速秋津比売神の二神がそれでありまします。この二神は河と海とでそれぞれ仕事の分担をされることになってまします。祝詞の中でも最も重要視される大被詞の中に速開都比咩という神が出てまいりますがこの女神は海に流れてくるあらゆるケガレをガブガブと飲み込んで抜い清めてくれる神としてえがかれてまします。

「かく聞し食しては皇御孫之命の朝廷を始めて天の下四方の国には罪といふ罪は在らじと科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹き掃ふ事の如く大津辺に居る大船を舳解き放ち鱸解き放ちて大海原に押し放つ事の如く彼方の繁木が本を焼鎌の敏鎌以ちて打掃ふ事の如く遺る罪は在らじと被ひ給ひ清め給ふ事を高山の末短山の末より佐久那太理に落ち多支都速川の瀬に坐す瀬織津比咩といふ神大海原に持ち出でなむ。かく持ち出でいなば荒塩の塩の八百道の八塩道の塩の八百会に坐す速開都比咩といふ神持ちかか呑みてむ。かくかか呑みてば気吹戸に坐す気吹戸主といふ神根国底之國に気吹き放ちてむ。かく気吹き放ちてば根国底之國に坐す速佐須良比咩といふ神持ち佐須良比失ひてむ。かく失ひてば天皇が朝廷に仕へ奉る官官の人等を始めて天の下四方には今日より始めて罪といふ罪は在らじと……」

じつに壮大な形容、雄大な思想ではありませんか。この大被詞の根本をなす思想はこのツミやケガレに対する浄化力、大自然の自浄作用を高らかに歌つたところにあると考へるべきであらうと思ふの

であります。

そうして、この自浄作用を神格化したのがハヤアキツヒコ、ハヤアキツヒメであり、またアキグヒノウシノカミであると考えることができるとあります。ハヤアキツヒコ、ハヤアキツヒメは男女、陰陽を示したものであり、それらを綜合した力（作用）をアキグヒノウシノカミと表現したのだと考えたらいかがなものでしょうか。

フヅラヒノウシノカミが身体における自然治癒力をあらわしたものであり、アキグヒノウシノカミが大自然にかける自浄作用をあらわしたものであると解釈いたしますならば、われわれが今日こうして健康な生活を送ることができ、また、清らかな自然の環境に恵まれて平和な生活をいとなむことができるのはこれらのカミ（力、作用）のおかげであると感謝の念をいだかざるを得ないのであります。人間のしでかすみにくい争いやツミやケガレも終局的にはきれいに被い清められ調和のとれた平和の世界が目に見えないところでわれわれを支えてくれていると考えられることは人類へのこの上もない救いであるといふべきでありましょう。

### 研究室だより

◇研究室が一つふえましたが（五研）浮橋・井上両先生の新しい机を持ちこみますと、相変わらず、楽しいながらもせまきわが家です。去年よりにぎやかさ倍増で、朝から学問論議やら研究旅行の計画やら、時にはあんまり討論に熱中して、お弁当を二つ召しあがる先生もいたり。立正短大名物の文芸科研究室の活気と笑い声はいまも健在です。

◇夏休みがあけて、陽に焼けた学生達の顔が研究室に一度に溢れんばかりになりました。みんな拓本とりや文学遺跡の探訪などで、休みの後半の毎日を汗だくで歩き廻った顔、顔、顔です。埋もれていた地方作家の研究や、各地の図書館の写本板本の書目調査などで脇の本棚はもう一杯。予想通り、部屋に入っただけでいらっしやる先生方が、取り出しては感嘆の声をあげながら見入っていらっしやるのには嬉しくなりました。

◇六月に日本文体論協会全国大会の会場をひきうけましたとき、全国の先生方から、うちの学生が、「明朗でしっかりしている」とおほめをいただいたことは、嬉しいことのひとつです。

◇奈良・飛鳥地方（一年）・山陰山陽地方（二年）の文芸研修旅行に、学生の皆さんは大張切りでした。平城京の発掘に参加し、万葉人をおもかげにして飛鳥路を踏破し、また鳥取の砂丘に立ち、秋芳洞を歩くときはスポーティなスタイルだったのが、京や広島島の街ではさすがにエレガントなスーツに変わってしまったと、先生方のお話でした。

(N)